**説教20230205　１コリ9：24-27マルコ1：40-45「やみくもに走らず」**

**「やみくもに走らず」と言うのが今日の説教題ですが、何かこれでは言わんとしていることがはっきりしないですね。**

**これは、私たちの信仰の歩みの様を言い表しています。時に、私たちは走るように信仰の道を前に進めることがあるのです。でも、何かしっくりしないというのは、そもそも信仰の道は歩むことであり、走ることではないとの私たちの思いがあるからでしょう。**

**イエス様が、私たちの日々の歩みの一歩一歩を光で照らしていて下さるから、私たちは平安に満ちて、その道を静かに着実に歩んで行くことが出来る、と言うのが私たちの信仰の道であります。しかし、その信仰の道の有様をつぶさに見ていきますと、この地上の歩みにおいては、私たちは折に触れて、試練に遭遇することを避けられません。或いは試練に遭遇することが欠かせないのです。私たちは神様が置かれた試練の中で、練られ、鍛えられて、その信仰を益々深く大きく育てられるからです。**

**詩編２３編では、その試練の時を、死の陰の谷を行くときと言い表しています。「死の陰の谷を行くときも／わたしは災いを恐れない。」これが将に信仰者のあるべき姿ですが、実は、死の陰の谷を行くような時に、恐れを感じない人など、この世に一人もいないことでしょう。とにかく死に直面させられるような状況におかれて人間は心と体が動揺して、走り出してしまうのです。それは、物理的な体の動きに表されないでも、自分の内部で、心と体が衝動的にほとばしるということです。自分では制御できないうちに、心と体がほとばしるということです。**

**現代社会に目を向けますと、この自分では制御できない、衝動的な心と体のほとばしりによって、様々な苦しみに満ちた事件や事故が起こっています。それらの出来事は目を背けようとしても、この目に飛び込んできて、私たちはさらに苦しんでしまいます。この人間的なほとばしりを放っておくと、すごく大変なことになってしまうという予感を多くの人々が今、持っていることでしょう。しかし、この人間的なほとばしりを止めるのに、最新の科学をはじめ、人間の知恵に基づく叡智は何ら役に立たないばかりか、かえって、その勢いを増すのに加勢していると言ったケースも見受けられます。**

**では、信仰の道においてこのように人間が走りだす時、ほとばしり始める時、神様は、何もなさらないかと言うとそうではなくて、神様のほうも走り出して私を抱きかかえて迎えて下さるのです。ちょうどルカ福音書のたとえ話で、放蕩息子が、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻したシーンの通りであります。**

**つまり、神様は人間が衝動的で破壊的なほとばしりをし始める時に、神様的なほとばしりによって対抗して、その人間的なほとばしりを食い止めて押しとどめて下さるのです。この様に神様的なほとばしりと人間的なほとばしりとは全然違って、神様的なほとばしりは永遠の命に至る善の道であり、人間的なほとばしりは破滅へと至る悪の道なのです。**

**弟子たちがイエス様と共に、ガリラヤ湖に漕ぎだした時、大嵐に見舞われ船が沈みそうになりましたが、イエス様は眠っておられました。弟子たちは恐れのあまり、人間的なほとばしりによって、イエス様に「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言ってしまいました。それに対しイエス様は、神様的なほとばしりによって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われ、弟子たちに「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」と言われたのでした。**

**又、ペトロは、十字架の死と復活を予告したイエス様を、人間的なほとばしりによって、いさめ始め、「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」と言いましたが、それに対してイエス様は神様的なほとばしりによって、「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている」と言ってペトロを、すぐに叱責されたのでした。**

**今、聖書から二つの例を挙げましたが、ここで分かりますことは、主イエスは、御自分を信じる者を、決して放ってはおかず、すぐに神の愛をほとばしらせて、信じる者には御言葉を与えて、信仰者を正しい道へとすぐに連れ戻して下さるということです。**

**この神の愛のほとばしりという出来事は、古くはイスラエルの民たちが荒れ野をさ迷い始めた時に起こりました。そこに飲み水がなかったので、神はモーセを用いて、モーセに手を上げさせ、その杖で岩を二度打たせて、そうすると岩から水がほとばしり出たので、共同体も家畜も、そのほとばしる水を飲むことができたのでした。又ホセア書１１章にはほとばしりでる神の愛の言葉が次の様に記されています。**

**ああ、エフライムよ／お前を見捨てることができようか。イスラエルよ／お前を引き渡すことができようか。アドマのようにお前を見捨て／ツェボイムのようにすることができようか。わたしは激しく心を動かされ／憐れみに胸を焼かれる。**

**さて、今迄、私なりに神様的なほとばしりを説いて参りましたが、皆様もそれぞれ、神の愛のほとばしりを思い起こしておられることと思います。**

**では、パウロは、この神様的なほとばしりについてどのように語っているのかを、今日のコリント書から見て参りましょう。**

**ここに競技場のことが出て参ります。この競技場と言うのは、今の世界史で習いますローマ帝国各地にたてられた円形闘技場（コロッセウム）のことでありまして、今でもその遺跡が地中海沿岸各所に残されています。そこでの出し物は、剣闘士同士の試合や、キリスト教徒や罪人を猛獣に襲わせる見せ物でありました。もちろんそんな場所をキリスト教徒は忌み嫌っていましたので、ローマ帝国内でキリスト教徒が増え、遂にキリスト教が国教になる過程で、競技場の数も減らされていったということです。**

**使徒パウロも勿論この競技場をよく思っていなかったはずですし、嫌悪していたはずです。ところが、今日の聖書箇所で、パウロはわざわざその競技場での競技者の話をするのです。これは、一種のたとえ話でありまして、ここでパウロは競技者と信仰者とを較べているのです。今日の説教の言葉を用いれば、パウロは人間的なほとばしりと神様的なほとばしりを較べて、両者の違いを際立たせようとして、この挑戦的なたとえ話をしているのです。人間的なほとばしりと神様的なほとばしりとは似て非なる出来事で、全く違うことではあるけれども、勢いよくほとばしり出るというその様子においては似ているのです。**

**先ずその似た点を上げますと、競技者も信仰者も、賞を受けるためにほとばしり出るということ、そして、両者とも節制に励んでいるということです。**

**そして両者が違う点は、競技者で賞を受けられるのは、たった一人だけですが、信仰者で賞を受けられるのは、信仰の道を全うした全員であるということです。又、競技者が受ける賞と言うのは、この世でいつかは更新される、はかない朽ちる冠なのに対し、信仰者の冠と言うのは最後の最後の完成の時に、永遠の祝福として与えられる朽ちない冠なのです。**

**この二つの冠のどっちを追い求めるのが良いか、それは言うまでもないことですね。**

**そして両者とも、節制に励むでありますが、その節制の仕方も全く違うのです。競技者は勝つためにどうやって節制しているのか。先ず、体を鍛え、精神力も鍛えることでしょう。食事もきちんと整え、無駄な肉がつかないように節制しながら、その競技に勝つために規則正しい生活を続けることでしょう。**

**パウロはこの様な節制のことを価値あることと認めてはいますが、ただし、この様な節制だけでは十分ではないと言っています。**

**テモテへの手紙一4章 7節８節でパウロは次の様に語ります。**

**信心のために自分を鍛えなさい。体の鍛練も多少は役に立ちますが、信心は、この世と来るべき世での命を約束するので、すべての点で益となるからです。**

**つまりパウロは、体の鍛練よりも信仰の鍛練のほうが大事だと言っているのです。**

**信仰者が節制をするのは、やみくもに走ったり、空を打つような拳闘をすることをコントロールする為ではなくて、「むしろ、自分の体を打ちたたいて服従させ」るのだと、パウロは語っています。「自分の体を打ちたたいて服従させる」ということは、とても実践的な事を云おうとしていると思われますが、今の私たちにはなかなかピンとこないような表現ですので、補足して行きたいと思います。**

**ローマの信徒への手紙8章 13節でパウロは端的に次の様に語っています。**

**肉に従って生きるなら、あなたがたは死にます。しかし、霊によって体の仕業を絶つならば、あなたがたは生きます。**

**パウロはよく肉と言う言葉を使って語りますが、この肉と言う言葉は、今日の説教にそくしていえば人間的なほとばしりを指すのでしょう。そしてその肉に対置されて語られているのが霊であります。これは聖霊のことで、今日の説教に即して言えば、神様的なほとばしりということです。**

**つまり信仰者にたいしては、聖霊なる神が、ほとばしり出て、すぐに彼を抱きかかえて守って下さり、その上で、彼を、御心に適った行いへと導いて下さるということです。ですから「自分の体を打ちたたいて服従させる」とパウロが語ったのは、自分の体が聖霊なる神にとらえられ、聖霊なる神のほとばしりに身を任せて、我が身を神の御業に委ねると言う意味だと思われます。**

**最後にパウロは、「それは、他の人々に宣教しておきながら、自分の方が失格者になってしまわないためです。」と補足していますが、それは、宣教の業も、聖霊なる神のほとばしりによって成し遂げられ、同時に、自分の信仰の道も、聖霊なる神のほとばしりによって守られるということを物語っているでしょう。**

**今日のマルコ福音書に登場する重い皮膚病を患っている人は、いやされたのち、イエス様に「だれにも、何も話さないように気をつけなさい」と厳しく注意されたのに、大いにこの出来事を人々に告げ、言い広め始めました。実に罪深い行いでありますが、この行いも彼の人間的なほとばしりによって走り始めた行いであります。しかし、イエス様は、洗礼を受けた者に聖霊なる神のほとばしりを直ちに与えて、その信仰者を直ちに正しい道へと向き直らせて下さるのです。**

**祈ります**

**天の父なる神よ、**

**あなたは、私たちがかつて荒れ野をさ迷っていたときに、モーセに岩を打たせ、岩より水をほとばしらせて、メリバの泉を創って、そこで私たちを憩わせて下さいました。その大いなる恵みに感謝し、いつもすぐにやって来る、あなたの愛のほとばしりに身を委ね、あなたを賛美します。**

**私たちのこの一週間の歩みも、迷いと苦難に満ちた歩みでありましたが、あなたが私たちを捉え、この体を司って下さり、私たちの信仰の歩みを守り、さ迷い出ることを防ぎ、喜びの行いへと招いて下さったことに感謝申し上げます。**

**私たちがこの地上で遭遇する試練から、どうかあなたが救ってください。その試練をもあなたが豊かに用いて、私たちが信仰を鍛え、信仰を確かで深い物へと変えていく、機会として用いて下さいます様に。**

**どうか現代社会の分裂、争いに、あなたがすぐに介入して、私たちの人間的なほとばしりを抑え、私たちを隣人愛に満ちた行いのほうに導いて下さい。**